

自己評価の結果について

令和2年5月公表
学校法人 北邦学園
認定こども園
札幌自由の森幼稚園・保育園

令和元（平成31）年度に実施した認定こども園札幌自由の森幼稚園・保育園の自己評価の結果の概要は、次のとおりです。

1. 本園の教育目標

- ・ 思いやりのある子
- ・ たくましい子
- ・ 考える子

2 本年度、重点的に取り組む目標・計画

- ① 保護者理解と連携の強化
- ② 日々の保育環境の見直しと工夫
- ③ 乳幼児の交流
- ④ 職員間同士の協力、連携、情報共有の強化

3 評価項目の達成及び取り組み状況

評価項目	取り組み状況
「保護者理解との連携の強化」 「園の教育・保育に関わる積極的な情報発信」 A	・認定こども園としても4年目となり、様々な生活リズムの違う家庭への配慮について、職員一人一人が意識できることが増えた。今年度は、保育料無償化などの新たな仕組みも始まったが、職員内での把握にずれが無いよう、一つひとつ確認しながら園運営を進めていくこともできた。 ・2号認定園児に向けたクラスだより、園生活を伝える写真掲載を新たに取り入れてできる限り子どもたちの様子を伝える場を増やすことができた。また、例年課題だったホームページでのブログ更新を定期的に行うことができた。保護者との連携のため、今後も積極的な更新が必要である。
「保護者アンケートの実施」 A	・アンケートに関しては、しっかりと行事ごとに実施することができたため、職員間で共有し、次年度の行事への具体的な反省評価に生かすことができた。年度末には、昨年度同様、本園の教育保育や環境、職員対応など視点を絞ったアンケートを実施した。行事のアンケートとはまた違った保護者の考えを改めて知る機会となったため、来年度の園運営や職員一人ひとりの意識につなげるため、この結果をしっかりと共有する。
「迅速な情報提供」について B	・本年度取り入れた ICT システム「コドモン」により、保護者への一斉メールや資料の閲覧、登降園打刻、アンケート機能等を開始した。一斉メールでは、バスの遅延連絡、行事が雨天の際の連絡、熊の目撃情報について、新型コロナ

	ウイルスへの対応について、など、保護者に迅速で正確な情報を提供することができた。今後も、従来の方法にとらわれず、コドモンを生かした新たな方法で保護者連携に役立てていきたい。
日々の保育環境の見直しと工夫 「乳児保育室の環境整備」 B 「安全管理を意識した園舎内外の環境整備」 A 「絵本を通した取り組み」 A	<ul style="list-style-type: none"> ・0歳児保育室の手洗い場を設置することで、子どもの主体性につながる環境を整備することができた。また、クラスによっては、乳児保育室内の仕切り方や物の配置を新たな視点で見直し、より安心して生活し集中して遊びこめる環境づくりを試行錯誤しながら整えていくことができた。しかし、まだ子どもたちの遊びが限定されてしまう場面や、生活の流れが落ち着かない場面も見られるため、今後も環境の工夫が必要である。 ・駐車場舗道や森の中の遊具・遊歩道の整備、子どもたちの怪我につながるが多かった階段の手すりやマークの設置、温暖化に伴うクーラーの増設、職員の危機管理講習への参加など、安全管理を意識した園舎内外の環境整備を行ってきた。毎年できる範囲で工夫し、整備を続けていく。 ・昨年度から始まった「絵本を通した育児支援の取り組み」を0歳児から1歳児まで拡大した。今年度は、一人ひとりと絵本を読む時間がより温かいものになり、子どもがより絵本を大切にできるよう、絵本の置き方を工夫した。2歳以上のクラスでは、月に1度届く絵本をクラス全体で楽しめるような取り組みを始めたことや、園内研究保育で絵本をテーマに保育を行った。クラスによっては、それをもとに保育室の環境をお話の世界とつなげて活動を発展させることができた。
乳幼児の交流 「日々の保育の中での交流」 A 「行事の見直し」 A 「乳幼児間の職員の連携」 A	<ul style="list-style-type: none"> ・認定こども園となってから常に課題に上がっていた乳幼児の連携や交流については、年長児が2歳児と一緒に遊ぶ機会や0歳児のお世話をする機会を設けるなど、少しずつだが実践することができた。これをきっかけに、今後も日常的な交流を増やしていきたい。また、幼児クラスの間でも異年齢交流デーを設けるなど新たな試みを行うことができた。 ・誕生会を今年度より乳児幼児合同で行った。同じ認定こども園の仲間として、皆でお祝いするという雰囲気作りや、互いへの親しみにつながったり、職員同士が互いの子どもの育ちや保育を共有し合う機会とすることができた。 ・今年度は、職員配置の関係上、曜日や時間によって幼児担当職員が乳児クラスに入ることが多かった。そのことが、幼児クラスの職員の乳児保育の理解につながっただけでなく、乳児クラス職員の当たり前を見直すきっかけにつながった。まだきっかけに過ぎず、変化には至っていないため、今後も互いにアイデアを出し合いながら、新しい発見をし、全職員間で子どもの育ちや援助方法を細かく共有していきたい。
職員間同士の協力、連携、情報の共有の強化 「乳児幼児の協力体制の土台作り」 B 「職員間での主体的な話し合い」 B	<ul style="list-style-type: none"> ・今年度より、乳児幼児の職員シフトを一つにまとめ、全体像を把握できるようにした。そこで、上記にもあるように、乳児幼児の枠にとらわれずに積極的に行き来するシフト構成をとることができた。昨年度までは、職員配置も分かれていたので、互いの協力体制を意識することが難しかったが、今年度はその土台作りができたため、来年度もっと積極的に職員間で行き来することで一人ひとりが考えの幅を広げたり、助け合うことで業務内容の負担減につなげていきたい。 ・職員間で共有しなければならない連携や報連相でミスがあった場合は、謝罪で終わらせず、すぐに職員間で話し合うことを意識した。その際、管理職から

<p>「一日を通しての子ども理解の連携」</p> <p style="text-align: right;">A</p>	<p>の指示だけでなく、職員が主体的に改善点を考え、意見を出し合えるような場を作ることを意識した。自分たちで、同じミスを繰り返さないよう徹底するためにも、主体的な話し合いが今後も必要である。</p> <ul style="list-style-type: none"> ・認定こども園となってから、2号認定園児に対する職員間の連携が課題となる年が多かったが、今年度は午前中の担任と夕方の担当職員が互いに子どもたちの様子をよく見て、育ちや情報を共有しようという意識が多く見られた。
--	--

4 学校評価の具体的な目標や計画の総合的な評価結果

自 己 評 価	B
<ul style="list-style-type: none"> ・認定こども園として4年目の今年度は、学園として新しいICTシステムの導入をしたり、これまでの課題の背景にあった業務内容の圧迫を改善すべく、仕事内容の工夫や会議内容の検討、行事の見直し等を行ってきた。まだまだ改善が必要であるが、新しい試みをしたことで一歩進んだ評価や反省ができ、さらなる具体的な改善点や検討事項につながった。 ・積極的な食育への試みや、絵本を通じた保育の発展など、去年からの新しい取り組みを発展させることができた。また、それ以外にも、それぞれの子どもの育ちに合わせ、“子ども主体”を意識した保育内容を各クラスが工夫して行っていた。保育教諭が自分のアイデアを出しやすい職場環境作りを大切に、常に新しい取り組みに挑戦することは、今後も意識していきたい。 ・安全管理・危機管理については、環境整備の面と職員の意識の面で様々な工夫をしてきたつもりだが、今年度は新型コロナウイルス感染症拡大防止に対応する事態となった。学園として、悩みながらも子どもたちの安全を第一に考え進んできたが、今後このような想定外のことが起きたとしても、子どもたちのことを第一に考えられる園でありたい。 	

5 今後取り組むべき課題

課題	具体的な取り組み方法
<p>「研修内容の学び合い」</p> <p>「定期的な職員会議」</p> <p>「乳幼児の連携の強化」</p>	<ul style="list-style-type: none"> ・学園での様々な研修の企画や、外部の研修への積極的な参加はできたものの、やはり個人の学びでとどまってしまうことが多かった。研修報告書の回覧はこれまで通り行いながらも、研修翌日に必ず口頭での発表を行うなど、学びの共有と意見交換ができる場を設けていく。 ・今年度、職員間の日常的な疑問を共有したり、細やかな共通理解につなげていく目的で定期的な職員会議を設けた。内容も様々で必要性や効果を感じつつも、日常の業務に追われ徐々に回数が少なくなってしまった。今後は、年度当初に会議日程を決めるなど、計画的に実行していく。 ・乳幼児で一緒に行事に参加することや、幼児担当職員が乳児の保育を日常的に補助する機会が増えたこと、乳幼児の様々な学年で一緒に遊ぶ機会をもてたことなど、連携を少しずつ進めていくことができたが、まだ十分ではない。来年度は、乳児職員が幼児に関わる機会を増やすこと、異年齢交流を保育計画に盛り込むこと、乳幼児が合同でできる行事や会議の検討などを行い、職員同士の連携と子ども同士の交流をさらに強化し、互いに学び合い刺激を受けることで、子どもたちのより良い成長につなげていく必要がある。
<p>「保護者理解の視点に立った情報提供」</p>	<ul style="list-style-type: none"> ・保護者への情報提供については、ICTシステムを緊急連絡やスマホでのお知らせ閲覧に活用することができたが、お便りについては、発行のタイミングや量、内容が保護者目線で書かれているかという点において、まだ改善できる点があ

<p>「保護者との積極的で丁寧な連携」</p>	<p>る。その都度、例年通りではなく、保護者目線に立ったわかりやすい工夫を職員全員で考えていく必要がある。そのために、コドモンのアンケート機能も積極的に活用していく。</p> <p>・日常的に保護者が相談しやすい雰囲気や十分に作れていたかという反省が残る部分もある。連絡事項や表面的なことだけではなく、日常の子どもの成長について丁寧に保護者と語り合えるよう、職員全員が意識して関わり、積極的に電話連絡等の時間をとっていく必要がある。そうして、保護者と園が相互に理解し合える機会を確保し、連携強化や迅速な対応に努めていく。</p>
<p>「乳児・幼児の玩具の見直し」</p> <p>「子どもの視点に立った環境構成の工夫」</p> <p>「戸外遊びの確保」</p>	<p>・0～5 歳児に適した玩具について、学園として見直しをしながら話し合いを行い、統一の資料を作成することができたため、今後計画的に購入していく。年齢や本園の環境に合わせて吟味した玩具と、意図が見えにくい玩具が混在している保育室等もあるため、しっかりと見直しをして日常の玩具を選び、環境として用意する時期についても考慮する。</p> <p>・特に乳児保育室について、少しずつ環境を整えてきたところではあるが、クラス担任だけにまかせるのではなく、研究保育などを通して複数で意見交換をしながら、安心して生活できる空間づくりや遊びこめる環境づくりを工夫していく。</p> <p>・今年度は、子どもたちの自然への興味を高めるため、戸外遊びの時間を十分に確保したいという思いから、秋頃「森 DAY」（活動内容をクラスごとに分けたり細切れにしたりせず、登園から降園まで戸外で遊ぶ日）を設けた。しかし、年度途中からの実施だったこともあり、定着させることが難しかった。来年度は年間計画に盛り込み、各担任が計画性をもって「森 DAY」の意図を理解し、積極的に活動できるようにする。</p>
<p>「安全管理・危機管理の視点での環境整備の継続」</p> <p>「防災用品の活用・準備」</p> <p>「安全管理を意識と、子どもたちの遊び場を広げることの柔軟性」</p>	<p>・安全管理・危機管理の視点で今年度に引き続き、園舎内外の整備について検討・実施していく。また、来年度以降も常に継続的に改善できるよう、日ごろから職員間で意見を聞く場を設け、気づいた点を共有する。</p> <p>・昨年度の震災をきっかけに、防災用品を見直し新しい備品を多く購入した。しかし、その使い方等を職員全員で共通理解する場や、誰でもいざというときに活用できるような準備が不十分であった。購入したものをしっかりと、用途に合わせて活用できるよう、それぞれの職員でしっかりと共有する場を設ける。</p> <p>・今年度特に幼児クラスで職員が増えたこともあり、遊ぶ場所に十分に職員配置をすることができ、毎日の「ヒヤリハット」を共有する時間も定着し、職員一人ひとりの危機管理意識の高まりも感じられた。しかし、安全面を気にするあまり、遊び場や遊び方が限定されてしまう場面も見られたため、安全・安心な環境への意識をもちながらも、子どもたちが主体的にのびのびと遊ぶことのできる環境について、改めて考える必要がある。「森 DAY」により、子どもたちの様々な遊びのアイデアを生かしていく十分な時間を確保した上で、日ごろから戸外の環境の生かし方について、職員が柔軟な考えをもてるよう、子どもと一緒に遊びこむことが大切である。</p>